

第六章 安納校区

第一節 安納校区の概要

安納校区は、種子島の北東部、東海岸に面しており、西之表市街地の東部約五〜六キロメートル離れたたなだらかな台地上に位置している。北は伊関校区、西は榕城校区、南は現和校区と境を接し、東側は広大な太平洋に臨み、集落は安納川北岸沿いの大平・峯・下郷の三集落と伊関校区に隣接する軍場集落から成り立っている。



図8-11 安納校区の位置

地理的には海岸段丘が大きく海岸線近くまでせり出しているが、南側に安納川が流れ、これにより沖積平野が形成され、島北部としては中規模な水田地帯が開かれている。また、恵まれた気象条件と海岸線までのゆるやかな傾斜を利用してサツマイモ（安納芋）・さとうきびなどの栽培や畜産が行われている。九州沖縄農業研究センターもあり農業中心の集落である。

ほかの地区同様、安納校区も過疎化が進み、若い青壮年層の流出や児童数の減少とともに高齢化が急速に進んでいる。人口の推移をみると、昭和六年（一九三二）は一一八〇人、同三十年は一五八五人と増加傾向にあったが、同四十七年は九四四人、令和五年（二〇二三）十一月末の現在の人口は、男性一六五人、女性一七四人の計三三九人と漸次減少してきている。

なお、現在の世帯数は一九三戸である。

また、郷土の歴史や文化遺産にも恵まれており、郷土芸能の継承（棒踊）にも地域と小学校が一体となって取り組んでいる。



九州沖縄農業研究センター

第二節 安納校区の成り立ち

『種子島方角糺帳』によれば、村域は東西一六町一〇間（約一・八キロメートル）・南北一里八丁（約四・八キロメートル）、西之表札の辻から一里二七町余（約六・八キロメートル）。人家八一軒、うち仮屋元四一軒・軍場二八軒・沖ヶ浜田一〇軒・花ノ木浦一軒であった。元禄二年（一六八九）の『懷中島記』には次のように記されている。

村高八八石余、人数二二九。寺院には法華宗大会寺の末寺本蓮寺があり、寺領二石。延享頃（一七四四〜四八）の高二〇六石余（三州御治世要覧）。化政期の高一五五石余、総人跡四〇八。

第三節 地名・字名

一字名

花ノ木・正九郎峰・下ノ田代・中園・上園・栗山・居辻・後居辻・牟田・牟田下り・中峰・大迫・安納原・溜池・正助道・長瀬ノ岡・大浦道・長仁田・松元・山崎・松ノ小田・泥川・兎狩・濁水・鉈田・山之神・源作・三郎峰・番木屋ノ峰・大峰・春ノ小田・北山ノ神・馬走原野前・馬走原・苗代道・捨苗代・苗代岡・鉢ノ底・峰下・俣江・新三郎・波江ノ岡・松計田・原・真奈塚・西真奈塚・馬走迫・市五郎後ノ鼻・蕨ノ平・長尾田ノ鼻・宝久保・黒立山・出口・佐賀リ山・長々野・鞍掛松・湯穴ノ口・山田・原ノ園・池ノ迫・下池ノ迫・牧ノ口・西池ノ迫・墓ノ山・南ノ園・上ノ園・下ノ園・渡前屋敷・栗木ノ田代・上牧ノ口・中平原・上平原・後ノ迫・久佐木山・下平原・小苗代・羽毛高松・赤尾ノ迫・種子島原・二栗・石之峰・柳畠・上石之峰・毛狸・大川田・西大川田・下松中峰・上松中峰・大平口・小峰之下・紅梅ヶ小田・川之小田・山之神田・蔵田・上大川田・前ヶ原・中前ヶ原・上前ヶ原・下立目・鳥ノ巢・仏之峰・浜之田・釜牟田・石原田・中立目・出口・松崎・前川原・沖ヶ浜田・平・居森・上ノ平・車門・後ノ小田・上立目・古之山・中之鼻・大中野・山之口・牟多田・瀬戸ノ上・砂坂・瀬戸ノ平・霞ノ下・牛落シ・田代之松・鷺ノ山・栈敷・瀬

脇・竹之脇・小田代・大田代・川崎・梶ノ元・大石ノ元・掛庭・織佐・大平・駒稚ヶ谷・安納川・鼻指・林ノ山・小田之立山・木ノ口・大牟礼・川田代・清水・長谷・小谷・虫屋野・屋所・女道ヶ小田・平五郎・鼻四郎・牧ノ平・北牧ノ平・小塚ヶ小田・向ノ小田・浦之田・馬込

二地 名

安 納

『鹿児島懸地名考』によると、「アン、ノヤ」から変化してきたもので、アンは全部、ノヤは蓬、すなわち上古は全部ヨモギの原野であったと考えられる。

軍 場

昔、身分の高い人がここへ来て居を構えた（渡前屋敷）。やがて追手の人がここに来て激しい戦いが行われた。追討の人は逆に殺されたのだが、この地で激しい戦いがあったので軍場という地名がついたという。また、安納で最初に開けたところは軍場であったとも伝えられている。

花 ノ 木

『種子島旧浦沿革書』によると、江戸中期、洲ノ崎から浦分かれして始めた浦であったという。

番小屋の峰

試験場の北西の峰を指す。昔ここに沖の見張所があり、維新前、黒船の来航がたびたびであった頃、毎日二・三人ずつ交代で詰めて見張をしたことによる。

鞍掛松

軍場にあるこの字は、昔種子島の殿様が鹿狩りにこの地に立ち寄った際、馬の鞍を松に掛けたことにちなんでつけられたという。



花ノ木浦開祖の碑

謎多き天女ヶ倉

軍場の嶽「天女ヶ倉」（標高二三七・九^尺）の山頂付近を里人は「アマメガクレ」あるいは「アマメガクラ」と呼び、特別な場所（聖地）としてきた。ここには直径二間ほどの巨石が二段重ねになっており、中は数人が入れる空洞になっている。そこには昔、鎌倉より来島の折、日高氏の祖が背負ってきたと伝えられる日の妙見神（天御中主神と同神）が祀られていた。

現在、この神様は、明治になり合祀された豊受姫神とともに、



天女ヶ倉の巨石

安納大平の安納神社（天神楽神社）に祀られている。しかし、頂上の巨石の前には現在でも小さな祠が残っており、病氣平癒の神として参拝する人は絶えない。頂上につ

ながる道の左右に山川石の石塔がそれぞれ一基ずつあり、石塔には「疱瘡退散、当村大平郷中」と記されている。明治十九

年（一八八六）八月四日に建立されたもので、十数人の名前が刻まれている。

また一説には、この峰は古来巨石信仰の霊地であったといわれ、修験道の霊場であったこと、霞の下という字名も残っていることから天女ヶ倉ではなく、「阿弥陀ヶ倉あるいは阿弥陀座」だったのではないかという説もある。修験者であった一〇代島主種子島幡時（一四〇五〜一四六二）がここで修行したり、魔立ての岩屋（犬城海岸）で不慮の死を遂げる前に、この天女ヶ倉の巨石の下に隠れたという言い伝えも残っている。

平成二十八年（二〇一六）十一月二十六日には、公益財団法人日本離島センターから「しま山一〇〇選」に選定された。

恵時の隠居

『種子島家譜』第二巻に、「永禄九年丙寅 恵時、禰寝に往きて常陸助（恵時の甥）宅に留滞す。時堯喜ばず。船を遣して迎へしむ。（中略）船中大いに戦ひ、遂に難を逃れて島に帰る。是より恵時安納村に隠居す。」とある。

一三代島主種子島恵時には、島主時代の数々の戦功があるが、特筆すべきは天文十二年（一五四三）の禰寝戦争である。原因は、弟時述の反乱に端を発したと言われるが、元はと言えば、恵時の身勝手で群臣の悲痛な訴えにも耳を貸さなかったことにあるという。その恵時は、『種子島家譜』にもあるように、永禄九年（一五六六）安納村に隠居し、翌年三月十四日に死去し



「安納城跡地」周辺地図

ている。その間僅かに一年
 足らずであった。

「県の中世城館跡―中世
 の城館跡調査報告書―」に
 は、本市にある六つの城館
 跡の中に「安納城」の記載
 があり、次のように報告さ
 れている。

所在地 (大字安納字屋
 所)
 立地 (山麓、丘陵、平
 地)

現況 (山林、水田、畑、寺社境内)
 規模・形状 (二〇〇メートル×二五〇メートル)
 残存度 (やや良)

存続期間 (不明)

築城者 (種子島氏)

地名 (屋所、居辻、後居辻、小谷、虫屋野、女道ヶ小田、
 北牧ノ平、牧ノ平) 遺構 (なし)

遺構については、特段の記述はないものの、実測者である山
 崎・関両名はその他史料として、石皿、縄文・弥生土器片、土
 師器片、須恵器片瓦片、伊万里焼片が発見されたことや地名と
 して「堂の山」も記している。また、築城者、築城時期、存続

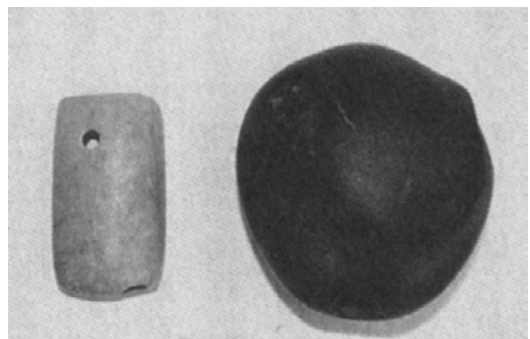
期間は不明としながらも、主
 要居城者として一三代恵時の
 名をあげ、伝承者として安納
 地元民五人をあげている。

前述のようなことから、恵
 時が晩年を過ごした場所と言
 えるのではないだろうか。

縄文・弥生時代の遺跡

安納には、縄文時代早期～
 前期の遺跡として「俣江遺跡
 (軍場)」があり、縄文時代後

期の遺跡として「大平遺跡 (大平)」そして、弥生時代中期の
 遺跡として「峯遺跡 (峯)」がある。中でも注目すべきは、峯
 遺跡から出土した「石笛」である。発見当時は、南九州地域で
 は発見例が少なく、僅かに二個、いずれも本市で発見されてい
 る。残りの一つは現和巢遺跡 (現和川氏) で発見され、縄文時
 代後期のもので、翡翠でできている。峯遺跡の石笛は頁岩で、
 ややひずみは見られるが、棒状のもので穴が五カ所あいている。
 自然にできた穴なのか、人工の穴なのかははっきりしないが、
 吹きながら指を当てるとあたかも縄文人の音楽のようで、いろ
 いろな音色が出たという。その使用目的については、未だ謎の
 ままである。



石笛 (左：現和巢、右：峯)



現在の安納小学校

明治時代の安納小学校

「安納尋常小学校沿革史」(明治四十二年編纂)に次のように記されている。

安納小学校創立以前ノ教育ハ第七十三郷支校ナルモノヲ置キ極メテ粗悪ナル屋内ニ於テ郷校ヨリ毎月数回交番ニ教育ヲ汎シ僅カ少数ノ子弟ヲ集メテ讀書習字ノミヲ授ケタリシガ尚其以前ニ溯レバ明治維新前僧智周アリ漢籍ニ通ズ從ヲ当地ノ人鎌田仲兵衛全十次四書ノ類ヲ解スルニ至リ就テ学ブモノナリ降テ明治五年ヨリ数年間西之表ノ人西村詠山氏当地ニ滞留セラレシガ同氏亦能古籍ニ通曉セルヲ以テ就テ学ブノ子弟其数ヲ加ヘ漸ク文学ノ曙光ヲ見ルニ至ル尋テ所謂七十三郷校支校ヲ設ケラレ以テ本校創立ノ際ニ及ブ

以下小学校の歴史については、

「第七編現代第二章教育」に掲載している。

農村電化の碑(峯)

終戦後、東海岸一帯の各農村は無灯火地域であった。昭和二十四年(一九四九)、有志の間で地域開発と農業振興のため水力発電所の導入を計画した。翌二十五年一月二十四日に熊毛農村自家用電気利用組合を結成し、建設へ立ち上がった。署名運動・陳情活動等を行い、同年安城大川田川上流に発電所を着工し、ダムと発電設備が完成した。しかし、工事の継続が困難となり、西之表農業協同組合に工事の継承を仰いだ。同二十七年二月、一連の水力発電所完成し、全村落に初めて灯りがともった。しかし、同三十五年十二月同発電所が火災を起こし、九電から有償で電力の供給を受けていたが、昭和四十一年九月一日付をもって九州配電株式会社へ移管され現在に至っている。

昭和二十六年から発電事業に関わった農協職員芝直英の記録によると、次のとおりである。

昭和二十二年、通産



発電用取水ダム

省令で、全国各地の無点灯地区解消のため、長期低利資金の融資が実施された。融資金額は一六〇〇万円、受益者負担金六〇〇〇円で出資総数は一〇〇〇名として六〇〇〇万円、計二二〇〇万円で事業計画を策定。電源は安城・立山間を流れる大川田川、出力は一〇〇馬力、七五誌、機械は日立製作所製と決定。点灯区域は、東海岸の南端立山から北は伊関までとしての計画であった。会社は、貯水堰堤、導水路、発電所用地、その他一切を利用組合から引継ぎ、再度の測量やり直して工事に着手、約一年後に工事完成。待望の電灯の光は見るものの、水量不足で完全送電とはいえず、終夜送電も出来ない日が続き、貯水池の堰堤の高上げを試みるも冬場の渇水時には、夜間の運転は出来ない有様。やむなく火力発電機増設に踏み切り、水力と火力を交互に運転することで辛うじて問題を解消できたのである。

旧安納飛行場（峯）

井元正流著『種子島今むかし』には、建設計画から廃港までの経過が記述されている。

昭和二十七年から中種子町に規格外空港（松原飛行場）が開港したことに伴い、同三十一年頃から商工会を中心に「西之表にも飛行場を。」の声が湧き上がる。当時、鹿児島県は「一つの島に一つの空港」の方針を立てていたが、本市では飛行場対策特別委員会を設置し、飛行場建設を計画した。

昭和三十三年十二月、中種子空港は県に移管され、第三種空港として整備された。そのような情勢の中、本市は独力で西之表（安納）飛行場建設を企画し建設を開始した。

昭和三十四年二月十二日に西之表市営飛行場が開設された。空港の規模は、幅四〇^{メートル}、長さ南北九〇^{メートル}の滑走路で、総工費二八九

五万円、東亜国内航空株式会社の四人乗りセスナ機が一〇人前後乗りのヘロン機が飛行するものであった。

しかし、同四十一年六月に廃港となった。廃港の主たる要因は、風向きの関係で東西に作るのが望ましいとされていた滑走路が南北に走っていたこと、飛行場を拡張する余地がなかったこと、採算割れにより会社が引き揚げたことが挙げられた。

跡地は、日活映画「零戦黒雲一家」のロケ地として使用されたり、砂利採取地としての利用もあったが、現在は勤労者体育センター（西之表市営球場、昭和六十年二月二十八日工事完成）や車エビ養殖場（平成元年設置）等に利用されている。



西之表市営飛行場（『ふるさとの想い出写真集西之表』より）

日本一の安納芋

安納芋の歴史をたどると、第二次世界大戦後、インドネシア共和国のスマトラ島北部に位置するセルダンという地域から一人の兵士によってもたらされたことに端を発している。安納芋は、これまで栽培していたサツマイモに比べ、格段に甘味が強いことから全島に広まった。平成元年（一九八九）から、農農業開発センターで優良品種の選抜育成が始まり、同十年に「安納芋」として「安納紅」と「安納こがね」の二品種が登録され、同二十五年まで種子島でのみ栽培が許可されていた。

その間、日本一美味しいという評判が全国に広がり、一大ブームを巻き起こした。その後、全国で栽培されるようになり、また別の美味しい品種が登場したことなどから、一時ほどの流行は見られない。

令和四年（二〇二二）三月二日に「地理的表示（GI）保護制度」に農林水産大臣登録第一一五号として登録された。「地理的表示（GI）保護制度」とは、地域で育まれた伝統を有し、その高い品質等が生産地と結びついている農林水産物や食品等の名称を、品質基準等とともに登録し、農林水産省が知的財産として保護する制度である。

第五節 甌島からの移住

『鹿児島百年（中）明治編』によれば、甌島は薩摩半島の西方約三〇キロの東シナ海上に浮かび、県下の離島の中でも一番険しい地勢を持つ島である。したがって耕地も極端に少なく、土地は痩せ、五年に一回しか耕作することができない切り替え畑となっている。人々は、飢饉におびえながらも、半農半漁で何とか飢えをしのいでいる状況だったとある。

このような生活だったところに、明治十六年（一八八三）に虫害で大きな被害を受け、追い打ちをかけるように同十七〜十八年と連続して猛烈な台風が襲来した。甌島は大飢饉となり、郡役所から続々送られてくる救援米や義援金も焼け石に水の状況であったことから、ついに住民は、島を離れることを決意し、県に移住を申し出た。当時の鹿児島県令渡辺千秋は、総予算五万円（国庫補助金二万五〇〇〇円、県費負担二万五〇〇〇円）をかけ、明治十九年から住民六〇〇戸を種子島へ移住させる計画を立て、実行に移した。当初三カ年の計画であったが、実際は二カ年で終了した。受け入れ側の代表は種子島出張所員の牧野篤好が務めた。

安納村の軍場にも、明治十九年に三戸、翌二十二年に二戸、合計五戸が移住してきている。

第八節 戦争と疎開

昭和十六年（一九四一）十二月八日、日本軍のマレー半島上陸及び真珠湾攻撃で太平洋戦争が勃発。同二十年三月には、グラマン戦闘機が西之表に來襲した。同年四月一日には、米軍が沖繩本島に上陸。種子島上陸も必至と考えられ、全島の小学二年生から六年生までの児童を対象に、県北の穀倉地帯に学童疎開を開始した。西之表からは約二八〇〇人が、大口・菱刈方面（現伊佐市）に疎開した。

安納小学校は、二年生から六年生までの児童一六四人が伊佐郡羽月村に疎開（自四月～至十月）した。付添保護婦は山田ナリ、山田ハル、日高トシ子、鎌田ミカ、日高ミエ、椎田イツエの六人であった。疎開中に四年生男子一人が病死し、十月六日に学校葬を行った。

体験談

疎開体験談

当時五年生でしたが、受け入れ家庭では自分の子どもと同じように大切にお世話され、特に寂しさや苦勞は感じませんでした。ほかの人も大事にされたようで、現在でも受け入れ家庭と贈り物をしたりして交流が続いている人もいます。一反ほどの畑で、サツマイモを作ったことが思い出の一つになっています。

戦争体験者談

当時は、カライモや麦飯などを食べていました。空襲があると、自分たちで作った粗末な防空壕に入りました。夕方空襲警報がなり、家族とともに山で一夜を明かしたことも四〜五回ありました。一七・一八歳の頃、増田飛行場（中種子町）の整地のため一〇日間ほど駆り出され、男性が崩した土砂をトロッコに積んで捨てたこともありました。現在、他国で戦争が起きていますが、「自分の家族が戦死したとしたらどう思うのか。自分は正しいことをしていると思っているのか。」それを問いかけたいです。



安納川の川辺に咲く「アリモリソウ」

第七節 人物

日高（安納）隠岐守（安納地頭）

安納村は、建仁年間（一一〇一～一一〇四）に種子島氏が南海一二島の島主として入部した頃から、数代にわたって地頭日高（安納）隠岐守が支配した。ここでは一人の人物としてではなく、各時代それぞれの日高（安納）隠岐守の業績について触れておきたい。

○初代日高（安納）隠岐守は、初代領主平信基公来島の折、従者として来島。安納の地頭職に補され、鎌倉より奉じてきた日の妙見神（天御中主神と同神）のご神体を、公務所南方の小丘（堂の山）に祠堂を建てて奉安した。（『ふるさと歴史散歩』）

○長祿二年（一四五八）、一〇代島主種子島幡時に命じられ、西村太郎左衛門と共に細島に三郎二郎（後の一一代島主種子島時氏）を迎えに行く。（『種子島家譜』）

○天文七年（一五三八）、日新公、島津実久と戦う時、加世田万瀬川や藤野原において戦功を立てる。

○天文十二年、三月二十三日、禰寝戦争の際、弟や伴の者二人で戦い、十余人の敵を倒すも戦死した。

○天文十八年、加治木、黒河崎合戦の際、太守の軍に属し戦い、軍功を立てる。

○弘治三年（一五五七）、

蒲生、北村、菱刈、祢谷

院、東郷の衆が蜂起し

ため、太守の軍に属

して西村越前守時安、

日高紀伊守宗俊、莖永孫左衛門、安納隠岐守等と力戦した。

○天正七年（一五七九）十一月五日、家老西村周防時玄の横暴に反対し、日高善右衛門、上里権助等と共に西村を殺そうと企てるも、芝左馬頭の裏切りにより殺された。

日高半十郎

軍場の本蓮寺再建の基礎を創った人物である。弘化四年（一八四七）五月十日生、大正十年（一九二一）没。明治九年（一八七六）に父半三は大阪に旅行の折、法華宗が栄えているのを見て心を動かされる。帰郷後、善応院日浩上人と連絡をとり、三二人の法華宗の信者を得た。

明治十二年に日高勇太郎宅に布教所をおいた。同十七年に遠



日高隠岐守墓碑



日高半十郎顕彰碑

場・沖ヶ浜田の法華宗門徒は合わせて一一七戸で、大変活気にあふれていた。

鎌田森也

安納区長など数々の要職に就き活躍した。井元正流著『種子島人列伝』によれば、明治二十六年六月二十七日生、昭和五十五年（一九八〇）四月十七日没。

昭和十一年松ノ小田（現在の安納小学校地）に、県に働きかけ、稚蚕飼育所（蚕の一齢〜三齢までの幼虫を育てる場所）の落成をみる。その後飼育所の建物は、安納小学校の講堂として利用されることになる。

第八節 年中行事

四 月

教職員歓迎会／海岸清掃／区会

五 月

各種団体年度当初総会

六 月

校区青少年健全育成運動推進会議／ナイターバレー大会／大祓い

七 月

和牛・園芸振興等各種農業関係総会／馬頭観音・安納神社六月灯

八 月

ふるさと美化活動／校区球技大会／校区畜産共進会

九 月

安納の子どもを考える会／高齢者宅訪問／小学校・校区合同運動会

十月

米初穂あげ／神社秋季大祭（願成就）／戦没者慰霊祭

十一月

ふれあい花園花植え／校区史跡巡り／第二回区会 市内一周
駅伝大会出場

十二月

市民総参加道路清掃／しめ縄づくり／大祓い

一月

新春歩こう会／元旦祭／勸学祭／ハマ祈禱・射場祭り／蚕宮
城

二月

黒糖づくり

三月

安納神社春季大祭

蚕宮城

正月十四日の夕方、集落ごとに行われる小・中学生（現在は
青壮年の協力も有）による祝賀行事である。養蚕が盛んだった

時代に、蚕の豊作を祝う行事だったが、現在は家内繁栄、無病
息災などを祝う行事として行っている。子どもたちが訪問する
前に、各家庭では、もち米を蒸してもちをつき、蚕の繭の形に
見立てた小さな切りもち（四角あるいは長方形）にして、柳や
コヤスギ（エゴノキあるいはヤマグワ）の小枝や枯れ枝にさし
て、もち花をいくつも作る。このもち花を門木、亭主柱、床の
間、仏壇、その他に飾って祝う。

十四日の晩に、子どもたちは一団で各家をまわり、玄関の所
で、「お祝い申す おつきやい申すか おつきやい申すか 年
頭のご祝儀上げ申す」で始まる蚕宮城このみやじょうの歌を合唱する。その後、
お礼として餅をもらい、背負ったカンザーこのみやじょう（ミチシバシチト
ウイで作った物入れ）に入
れて引き揚げるといいう行事
である。最近では、時代の
流れか、お菓子やご祝儀を
くださる家庭が増加してい
る。



蚕宮城と「カンザー」



天女ヶ倉から太平洋を望む

天女ヶ倉関連

「天女がくら」の由来については、確かなことはわからないが、次のような伝説がある。『ふるさと歴史散歩』の記述を要約して以下に示す。

はるか昔、仁王が国上の御崎から大石を背負って南に行く途中、天女がくらに立ち寄ると、西の海も東の海も見えて、眺めがとてもよいので一休みした。

しばらく休んでから、「サアーうったとうか」と立ち上がろうとすると、背負いかズラがブツリと切れてしまった。仁王は、カズラを結ぶのが面倒くさいと、大石をそのままほったらかして、さつさと南の方へ行ってしまった。天女がくらの頂上には、現在でも直径二間ほどの大石があって、そのそばの石の上に直径二間ほどの石が乗っている。その下は畳二枚敷ほどの余地があ

り、人が入れるほどの空洞がある。昔は、ここに神様が祀っていた。

里人は、ここを「天女隠れ」あるいは「天女神楽」と呼ぶが、それには次のようないきさつがある。

時がたち、いつしかこの大石の下に神様（天女御中主神）が隠れ住むようになったため、神様のおられる所を「天女隠れ」と呼ぶようになった。またこの神様は、踊りと音楽が大好きな神様で、天女隠れで神楽がにぎやかに行われた。昔は、信者が来てお籠りをする、夜中ににぎやかな神楽の音が聞こえたそうである。そのため、里人は「天女神楽」とも呼ぶようになったのである。

軍場の大山祇神社由来

『ふるさと歴史散歩』の記述を要約して以下に示す。

藩政時代、島主種子島氏はしばしば軍場付近の山野で鹿狩りをした。獲物は多かった。国上、伊関、安納を連合して広い範囲で島主と侍たちが狩猟をすることもあった。あるとき、島主は、「必ず山の神がいて自分を守ってくれるに違いない」と思い、現在の場所を選定して、国上の奥神社を勧請して、大山祇神を奉祀した。島主は軍場に來たら必ずこの山の神に参拝した。すると獲物がたくさん獲れたという。

里人も神社が建立されたことを大層喜び、現在でも集落の人々から厚く信仰され、守り継がれている。

五兵衛開きの天狗

五兵衛は、今年の田植えに間に合わせようと、「天女がくらの谷に小屋を造り、田を開こうと夜も月明かりの中で一生懸命働いていた。しかし、土地は石が多いところで、取っても取ってもなかなか減らず、石を取り除くのに苦労していた。五兵衛は、この土地を開くのは無理じゃないかと半ば諦めて、今日はこれで休もうと小屋に寝た。

すると、どこからか天狗たちが集まって来て、「この蒸暑さには、五兵衛もたまらんじゃろう。あの大石をのけてやろうや。このままでは、田んぼにやならんど」と言いながら、天狗たちは大石を田の端に転がして引きあげて行った。

夜が明けて、五兵衛はびっくり仰天、腰をぬかささんばかりに驚いた。五兵衛は、「人の力では到底動かない石だ。きつと神様が動かしてくれたんだらう」と、感謝しながら鋤をふるった。しかし、また大きな石がいくつも出た。この土地は本当にダメな土地かも知れんと諦め、そうして小屋に帰って寝た。

翌朝になると、大きな石はちゃんと田の端に置いてあった。「これは、やっぱり神様が天狗様のお陰だ。」と感謝しながら、五兵衛は一生懸命働いた。

天狗の力を借りて開いたこの田んぼを、村人は「五兵衛開き」と言い、後世に語り継いでいったという。

第一〇節 史跡、神社仏閣

堂の山の「ガラン」

日高隠岐守の住居跡（下郷）近くに堂の山と呼ばれる場所があり祠がある。昔はここにお宮があり、日高氏の先祖が鎌倉から種子島へ来島した折、背負ってきたという「日の妙見神」を祀っていた。後に、天女ガクレに合祀されたが、現在は、安納神社（大平）に祀られている。

堂の山の参道の入口を歩くとポンポンと音がする場所があるといい、里人はこの堂の山を「ガラン」と呼ぶ。現在も神聖な場所として崇めている。

安納神社（大平）（祭神

天御中主命 豊受姫命）

明治初年（一八六八）に廃された本蓮寺跡に昭和三十二年（一九五七）に、軍場の嶽、通称天女隠れの祠に祀られていた天女神楽神社を遷座したものである。

神社の祭りは新暦三月と十月の二十二日前後で、毎月二



堂の山のガラン



安納神社

十二日には月祭りが行われている。

境内には、本社を中心に、向かって右側には日高家氏神を祀る神社、西南戦争の戦死者を祀る慰霊塔、向かって左側には芝家氏神、鎌田家氏神がある。日高家氏神の祖は安納地頭日高（安納）隠岐守である。芝家氏神は、祖父である六代島主時充に会うために志布志から来島した野辺左衛

門尉盛純に同行してきた先祖を祀っている。鎌田家氏神は、祖は藤原氏で、鎌倉から来島し、西之表の城辺りで生活し、その後中種子の竹屋野に居住した。

軍場神社（軍場）（祭神 大山祇神 木花咲耶姫）

軍場神社は、国上奥神社の山の神を勧請し、狩場の里の森に奉祀したものである。島主鹿狩の際の休息場所、国上村の伊関から安納村にかけて鹿を追った時に利用したものである。

明治三十六年に、天女隠れの神祠に合祀したが、同三十八年に同地が国有化することになり、再び里の森の現在地に社殿を建立し、遷座奉祀したものである。

神社の本殿は拝殿の北

側に位置するが、ほかの神社と違い拝殿奥すぐに本殿があるわけではない。

拝殿の裏に回ると、小さな階段があり、そこを下ると小川がある。この谷こそ、外界と聖域との境界とされる場所で、いよいよここから聖なる空間へと入り込んでいく。

この聖域を、土地の人は

「オク」と呼び、許された人のみが入ることができる。小川に架けられた、これが橋だと気付かないくらいの橋を渡り一五歩ほどの階段を登ると、やがて小道は二手に分かれている。右側の細い道を下ると水の湧き出ている小さな泉があり、ここを水源として小川が流れている。この小さな泉は禊場や清掃等に利用されている。左側に進むと参道は行き止まりとなり、左手に五〇センチほどのステージ状の構造物がある。周囲はおびただしい数のサンゴ石によってしっかりと境界が作られ、アコウの巨木が覆いかぶさるように頭上にそびえる。このアコウの巨木に抱きかかえられるようにして、多少大きさに違いはあるもの自然石の板石を利用した祠状の構造物二基がある。ここが、本



軍場神社本殿（手前が大山祇神）



エビス神社

の宝庫であり、密漁が絶えなかった。そのため、江戸中期に島主は花ノ木浦を置き、監視役（西之表洲之崎の万右衛門）を常駐させた。

殿である。手前に、大山祇神、その奥に木花咲耶姫が安置されている。大山祇神は左右と上を大きな一枚岩で囲まれた小祠があり、木花咲耶姫は左右を一枚岩で上をサンゴ石で囲まれており、小祠はない。両神とも内部には、花瓶・水・御神酒・ロウソクなどが備えられ、左右に一对ずつ外側からササ塩井、塩井筒の順に吊り下げられている。また、真砂や貝殻、サンゴ石、小石がふんだんに敷き詰められたこの聖なる空間は、うっそうと茂る亜熱帯性の植物に囲まれ、一種独特の雰囲気醸し出している。（『西之表市の民俗・民具第二集』）

エビス神社（峯）（祭神 エビス神）

藩政時代、安納海岸一帯を花ノ木浦と称し、区域も大字安納馬籠川より以北、大字伊関西京川までとなっていた。海岸は遠浅の広大な丸石原で、ナガラメ（トコブシ）、伊勢海老、蜷類

神社の拝殿には、ご神体らしき様々な形態をした海や山の石が神棚の横にたくさん置いてある。

六月に願立てをして、十一月秋に願成就のお祭りをする。組合員は、年々減少傾向にある。

この神社のエビス神主は、昔から世襲制で、現在でも花木家が受け継いでおり、神社近くには花木姓の子孫の家がある。

なお、神社は、昔は波打ち際にあつたが、現在は勤労者体育センター（西之表市営球場）近くにある。

本蓮寺「法華宗本門流」（軍場）（本尊 日蓮上人）

創建年月日不詳。『郷土歴史大辞典』によると、天正年中（一五七三〜九二）に種子島家家臣の地頭安納隠岐守が建立した。

開基は日晶で、日蓮宗の消息文一通、日隆筆守一幅が宝物として伝えられていた。当初は

律宗寺で本伝寺と称していたが、法華改宗の時本蓮寺と改められた。なお、法華

改宗が行われたのは、寛正六年（一四六五）で、時の

島主は一代種子島時氏であり、時の安納地頭は日高

隠岐守であつた。元禄二年（一六八九）当時の本蓮寺



本蓮寺

は、大会寺末寺、寺領二石、茅葺社壇（二間四面）、茅葺堂客殿（四間三間）、茅葺庫裡（三間二間三尺）という規模の寺院であった。

現在の安納神社の場所にあった本蓮寺は、明治初年の廃仏毀釈によって伽藍は全滅し、当時残ったのは、日高家本尊六幅、曼荼羅六本、後に発見された三十番神四躰、鬼子母神像であった。廃仏毀釈後の明治十二年、日浩上人を住持として、日高半十郎の世話で日高勇太郎宅に布教所を設け、山田永叔も同住した。

明治十七年に軍場入口に教会所を設置、昭和二十二年に寺院昇格し、寺号を本蓮寺と改め、現在に至っている。境内には、日蓮上人五百遠忌碑（天明元年僧日誠建立）や日高半十郎顕彰碑、疱瘡軽安祈願石塔、文字のない石塔群がある。

疱瘡軽安祈願石塔（別名、疱瘡除けの石）は高さ三・五メートルの自然石で、その昔本蓮寺が現在の安納神社の地にある時、村の人々が人力だけで引いて来て祀った石である。



疱瘡除けの石

表面には、「南
無妙法蓮華経祈
疱瘡軽安 天明
六丙午八月時正
当村中 蓮信
坊」と刻印され
ている。

第一節 郷土芸能

安納棒踊（軍場）

市指定文化財。『種子島民俗芸能集』によると、明治の頃、旧始良郡加治木町から移住してきた大工石野政蔵から習ったものである。棒踊の見所は、激しい太刀さばきと一糸乱れぬ集団美にあるが、六人一組で構成され、一五〇センチほどの棒と七〇センチほどの鎌を使い、巧みな動作で、テンポよく棒と鎌がうち合う踊りは、薩摩示現流の流れをくむ激しくも勇ましく、気合のこもったものである。

毎年十月の神社秋季大祭（願成就）に、安納神社・軍場神社の境内で披露されている。

歌 詞

三回繰り返し歌われる

（出端）

オセロが山は 前は大川

かたげたつとは 中はにぎりめし

（本踊り）

一 やけののキジは岡の野にすむ

二 山太郎ガニは川の瀬にすむ

三 娘がボボをむこがなぐさむ

（あるいは一、二のうちどれかをくり返す）。

(引端)
やや山ではエーヘンヨー大川



安納棒踊

第二節 年 表

和暦(西暦)	安納校区のできごと
建仁年間 (一一〇一〜一〇四)	地頭日高隠岐守実信、平信基(初代島主) 下向の際従って来島。日の妙見神(天御中主神と同神)を堂の山に祠堂を建立して奉安
永祿9年 (一五六六)	一三代島主恵時、この年安納村に隠居。翌十年死没(六五歳)
明治	
5年(一八七二)	第七十三郷支校設立。少数の士族子弟を集め、讀書、習字を教える
12年(一八七九)	現和村に吸収される
13年(一八八〇)	四月十日、支校は廃止され、校名を安納小学校と称される。四年制、生徒数五〇人。同年十月から尾形新六が当校の助訓となる。学科は、修身・讀書・作文・習字・算術を教える
15年(一八八二)	現和村より分離。安納村となる
19年(一八八七)	四月、校舎を新築する。校舎(四三坪)校地(一九六坪)。在校児童五四人
20年(一八八七)	甌島より軍場集落に二年間(昭和二十年)で五戸の移住あり
22年(一八八九)	学制の改正により、安納簡易科小学校と改称される
25年(一八九二)	北種子村安納区となる。下村時夏氏兼任校長就任 沖ヶ浜田を伊関学校区に変更 改正小学校令により、安納尋常小学校に改称される

和曆(西曆)		安納校区のできごと
34年(一九〇二)	改正小学校令施行の結果、庄司浦は現和校学区に編入せられ、単級編成となる	
36年(一九〇三)	軍場神社を天女隠れの神祠に合祀	
37年(一九〇四)	十一月、天御中主大神社殿改築落成式及び豊受神社遷座合祝式	
38年(一九〇五)	軍場神社、天女隠れより再び里の森(現在地)に社殿を建立し、遷座奉祀	
41年(一九〇八)	改正小学校令により、二学級編成となる	
42年(一九〇九)	小学校令改正に伴い義務教育六ヶ年になる	
昭和		安納校区のできごと
11年(一九三六)	松ノ小田(現在の学校地)に稚産飼育所建つ。後、講堂となる	
12年(一九三七)	上之園より、現在位置(松ノ小田)に校舎移転改築する	
15年(一九四〇)	学制改革により、安納尋常高等小学校と改称	
16年(一九四一)	小学校令改正により、安納国民学校と改称	
20年(一九四五)	空襲激しく、二年生から六年生までの児童を伊佐郡羽月村に疎開(一十月)	
22年(一九四七)	三月、本蓮寺、教会所より寺院に昇格。寺号を本蓮寺と改める	
32年(一九五七)	四月、学制改革六・三・三制により安納小学校と改称 天女ヶ倉より現在地に安納神社遷座。昭和三十四年の説もあり	
34年(一九五九)	二月十二日、西之表市営飛行場(安納飛行場)開設。 長さ九〇〇メートル、幅四〇メートル。総工費二八九五万円	

和曆(西曆)		安納校区のできごと
37年(一九六二)	安納地内において日活映画「零戦黒雲一家」ロケ終了	
41年(一九六六)	六月、安納飛行場廃港	
45年(一九七〇)	四月一日、安納へき地保育所設置(五九人)	
49年(一九七四)	一月一日、「安納棒踊」市の無形文化財に指定	
52年(一九七七)	三月十三日、安納双葉保育園新築落成記念式典挙行	
60年(一九八五)	二月二十八日、勤労者体育センター(一五二六四・二二平方メートル)完成 球場(一一一八二・四平方メートル)	
平成		安納校区のできごと
10年(一九九八)	「安納芋」として「安納紅」と「安納こがね」の二品種が登録され、平成二十五年まで種子島でのみ栽培が許される	
令和		安納校区のできごと
4年(二〇二二)	三月二日、「安納芋」が、地理的表示(GI)保護制度により農林水産大臣登録第一一五号として登録される	



朝礼（昭和10年頃）
写真集『種子島・屋久島の100年』より



校区の発展に尽力した人々
（昭和10年頃）



ある日の教室（昭和33年）



校区大運動会（昭和26年）



安納小学校創立100周年記念
（昭和55年）



安納小学校全景（昭和55年）